

授業振り返りアンケートの結果は教員顕彰にも活用されています！

令和元年度より、授業履修者による「授業振り返りアンケート」の授業得点から優秀授業科目を決定しています。優秀授業科目の担当教員は、教員表彰規則に基づく優秀授業賞候補者として推薦されています。下記は、令和2年度の授業において優秀授業賞で顕彰された教員の一覧です。「授業振り返りアンケート」は、受講学生のより充実した学びを促進するとともに、教員の授業改善の取組を加速させることにも寄与しています。毎学期のアンケートは大変かも知れませんが、学生自身の率直な振り返りが本学の教育の質を向上させることにも繋がっていることを理解し、取り組んでいただければと思います。

優秀授業科目担当者

講義・演習科目				実技科目			
青木 竜	教職実践演習 (中・高)	幾留 沙智	スポーツカウンセリング論	青木 竜	ソフトボール①	瓜田 吉久	陸上・体操・水泳②
荻田 太	運動生理学	柊 ちか子	教職実践演習(中・高) 保健体育科教育法Ⅲ 特別活動論 保健体育科教育法Ⅱ 保健体育科教育法Ⅰ	柊 ちか子	ダンス②	小森 大輔	陸上・体操・水泳②
金高 宏文	キャリアセミナー	国重 徹	キャリアセミナー	坂中 美郷	バレーボール① 卓球①	塩川 勝行	バドミントン②
栗山 靖弘	教職実践演習(中・高) 教育方法・技術 国語・文章表現法	小森 大輔	教職実践演習 (中・高)	下川 美佳	専修武道論・実習Ⅳー剣道 専修武道論・実習Ⅱー剣道 なぎなた	竹中健太郎	専修武道論・実習Ⅳー剣道 専修武道論・実習Ⅱー剣道
坂中 美郷	教職実践演習 (中・高)	隅野美砂輝	スポーツマーケティング論 スポーツ産業論 キャリアセミナー	永原 隆	陸上・体操・水泳②	濱田 幸二	バレーボール① 卓球① ソフトボール①
高井 洋平	トレーニング科学概論	竹中健太郎	教職実践演習 (中・高)	前阪 茂樹	専修武道論・実習Ⅳー剣道 専修武道論・実習Ⅱー剣道	松村 勲	陸上・体操・水泳②
田巻 弘之	運動生理学	中村 勇	武道史	三浦 健	バドミントン② ソフトボール①	村上 俊祐	卓球①
中本 浩揮	教職実践演習 (中・高)	濱田 幸二	教職実践演習 (中・高)	村田 憲亮	陸上・体操・水泳②		
浜田 幸史	教職実践演習(中・高) 保健体育科教育法Ⅲ 特別活動論 保健体育科教育法Ⅱ 保健体育科教育法Ⅰ	松村 勲	教職実践演習 (中・高)				
森 克己	教職実践演習(中・高) 国語・文章表現法	山本 一生	教職実践演習 (中・高)				
山本 正嘉	トレーニング科学概論	吉田剛一郎	運動生化学				



NIFS-AP News 2022.6 VOL.11

- ◆教員からの授業メッセージ
- ◆卒業後アンケート集計報告
- ◆SCCOTテスト・PROGテストの経年変化
- ◆教員表彰

教員から体育大生へのメッセージ

「大学は大人の小学校」



スポーツ人文・
応用社会科学系

関 朋昭 教授

研究キーワード
組 織 クラブ
チー ム 部活動

スポーツマネジメントなどを担当している関 朋昭(せき ともあき)です。私は、クラブやチームなどの組織の問題を主に研究対象としていますが、研究の守備範囲は広い方です。さて、そもそも研究とは何でしょうか？ そのヒントは小学校にあるのではないのでしょうか。

まずは小学校の頃を一緒に思い出してみましょう。私は好きだった女の子のことを真っ先に思い出しました。なぜ思い出したのか？ 本気でその子を考えていたからです。「覚えたことは忘れるが、考えたことは忘れない」ある偉い学者が言っていたような。スポーツの話をしします。小学校時代、私はサッカー少年団に入っていました。そこそこ強いチームでしたが、全国大会の一步手前で必ずライバルチームに負けていました。その時に考えていたことは「ライバルチームはなぜ強いんだろう」逆説的に「自分たちはなぜ弱いんだろう」と真剣に考えていました。これは立派な研究テーマです。この疑問を当時の先生(監督)へ聞いてみたところ、先生は「相手チームはウチ(自分たち)よりもたくさん練習しているからだ」と答えました。「嘘だ」と思いました。

小学校の話へ戻りましょう。授業中、先生の説明が理解できない時には、私も友達も素直に「わかりません!!」と言える雰囲気でした。「わからない」ということを真面目に考えていた小学校の授業は、楽しかった思い出しかありません。皆さんも授業中に関わらず、先生の説明がわからない時は「わかりません」と堂々と言ってみてはいかがでしょうか。ちょっとした勇気が自分や周りを変えるはずで。皆さんの大学生活を応援しています。

「常に疑問を持ち、探求する心」

スポーツ医学を担当している廣津匡隆です。私が皆さんに伝えたいことは“常に疑問を持ち、探求する心”を持つことです。アスリートが自分の信じられるものを信じ続けていくことは大事ですが、信じるだけでなく今の自分に疑問を持つことも同様に大事だと思います。私は整形外科医となって20年以上経ちますが、医療において20年前と現在で変化したことは山ほどあります。スポーツ界においても、トレーニング方法や考え方など変化したことは多いと思います。このような変化はなぜ起こったのか？ まさしく、誰かが疑問を持ち、探求し、解明していった証です。そう考えると、現在の傷害予防やパフォーマンス向上のトレーニング法などは最良の方法なのでしょうか？ もっと良い方法があるかもしれません。“常に現状に疑問を持ち、更に良い方法などを探求する”ことが、皆さん自身の成長だけでなく、今後のスポーツ界全体の成長に繋がるのではないのでしょうか。

スポーツは集中すると、周りが見えにくくなりがちです。体育大学に入学し、スポーツについて勉強する機会を得たわけですので、有効に大学生活を利用し、もう一度自分の競技スポーツを客観的に見つめ直してほしいと思います。

大学生活はあっという間です。漫然と過ごせば、楽しい大学生活にはなるでしょう。しかし、身になる大学生活にしてほしいと私は願っています。要は、自分のやる気次第です。教職員は全力でサポートします。みなさんの頑張りを期待しています。



スポーツ生命科学系

廣津 匡隆 准教授

研究キーワード
膝関節
整形外科

半年間ありがとうございました

2021年9月から半年間、教育企画・評価室の業務に携わらせていただきました。学部・大学院・実業団選手時代を合わせると約10年間、鹿屋体育大学でお世話になりました。

本業務を通して、体育・スポーツを中心とした鹿屋体育大学の熱心な教育に、ハッとさせられることが多くありました。学生の頃は、当たり前のように大学の授業や教育を受けていました。しかし、職員の立場で学生のことを考えると、多くの場面で学生生活が充実するよう工夫されていることを実感しました。学生のみなさんは、自分のやりたいこと、今できることを見極め、鹿屋体育大学の地の利を生かして充実した学生生活を送られることを願っています。最後になりますが、室長の金高宏文先生、室員の先生方、業務を共にした日高嘉代子さん、教務課の皆さん、ご迷惑をおかけしながらも半年間ご指導いただき、ありがとうございました。



教育企画・評価室
特任研究員 青柳唯

よろしくお願いします

2022年4月より、教育企画・評価室に配属になりました大澤啓亮と申します。

出身は東京で昨年の9月から鹿屋体育大学に着任し、半年が過ぎました。鹿屋市に来ることは初めてでしたが、ようやく慣れはじめ、自然が豊かで食べ物が美味しくとても恵まれた環境だと日々感じております。

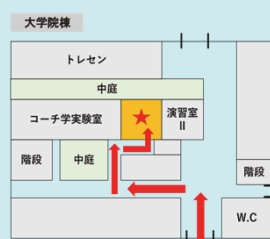
筑波大学大学院を卒業後は約5年間、日本スポーツ振興センター(JSC)で働き、国内外における競技力向上に関する情報の配信や競技団体の競技力の分析といった、競技力向上に関わる業務に携わっておりました。大学教育に関わることは初めてですが、皆さんの学生生活がより充実したものになるようサポートできればと思います。



教育企画・評価室
特任研究員 大澤啓亮

<発行>

鹿屋体育大学 教育企画・評価室
〒891-2393 鹿児島県鹿屋市白水町1番地
大学院棟1階
TEL&FAX: 0994-46-5082
E-MAIL: kyomu-ap@nifs-kac.jp
<企画・編集>
青柳唯・大澤啓亮・日高嘉代子・金高宏文



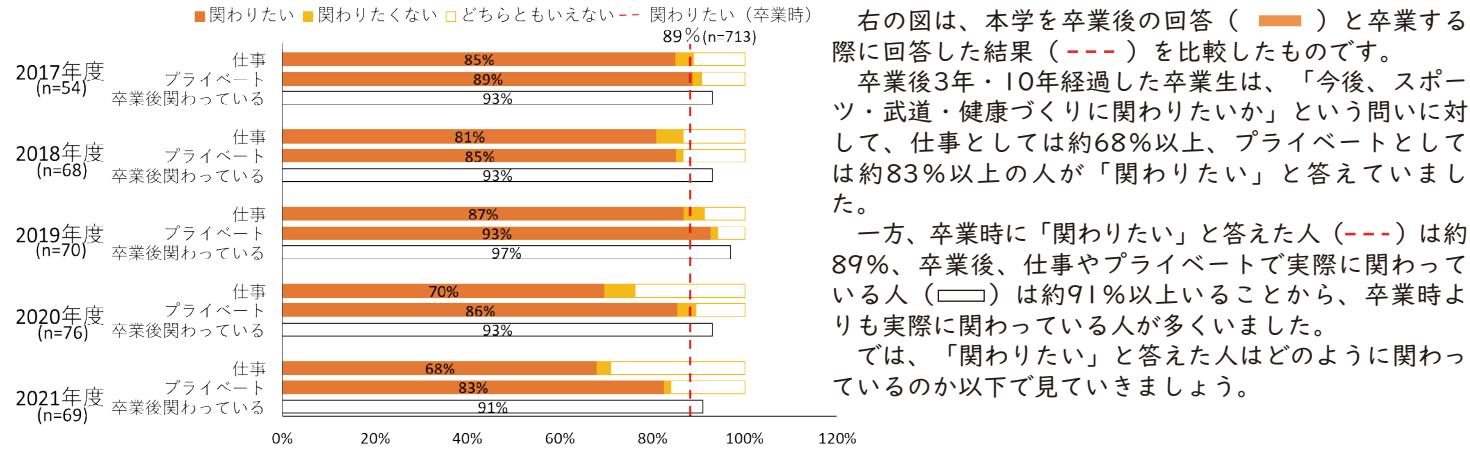
〓忍者パンフレットが新しくなりました〓



卒業後アンケート5年分 (2017年度～2021年度)

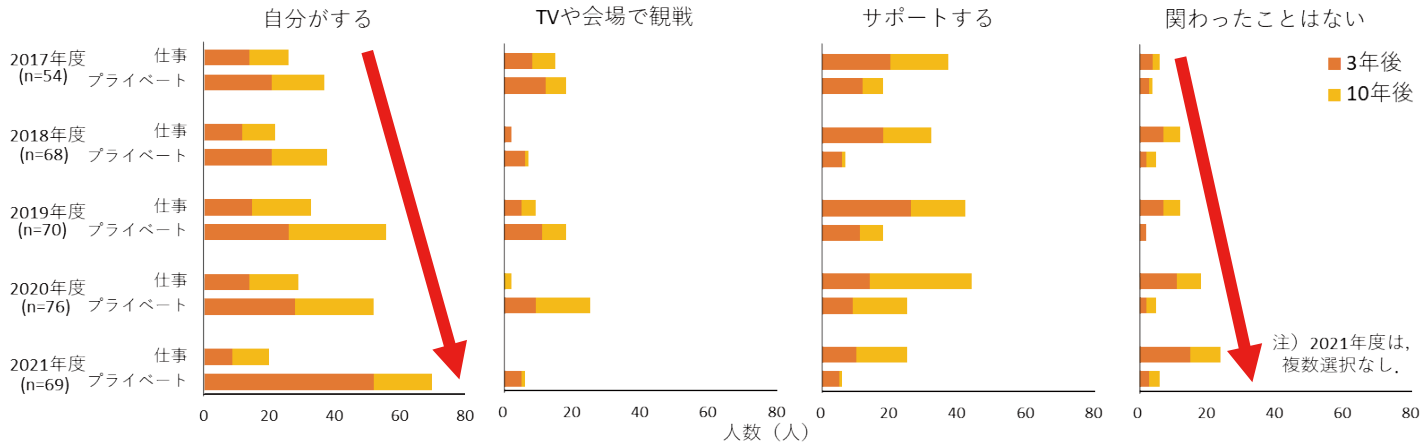
卒業後アンケートは、本学学生が卒業後にスポーツ・武道・健康づくりにどのように関わっているのかなどを調査しているものです。2017年度から5年間に渡り、卒業後3年・10年経過した卒業生を対象にアンケートを実施しています。教職員や在学生が卒業生の状況を相互に理解しておくことは、大学における教育や進路・キャリアデザインを考える上で重要になると考えます。様々なアンケート項目がある中、今回は卒業後、スポーツ・武道・健康づくりに「どのように関わったことがあるか」「どのような目的で関わってきたか」「今後、関わりたいか」について紹介します。

Q. 今後、スポーツ・武道・健康づくりに関わりたいですか？



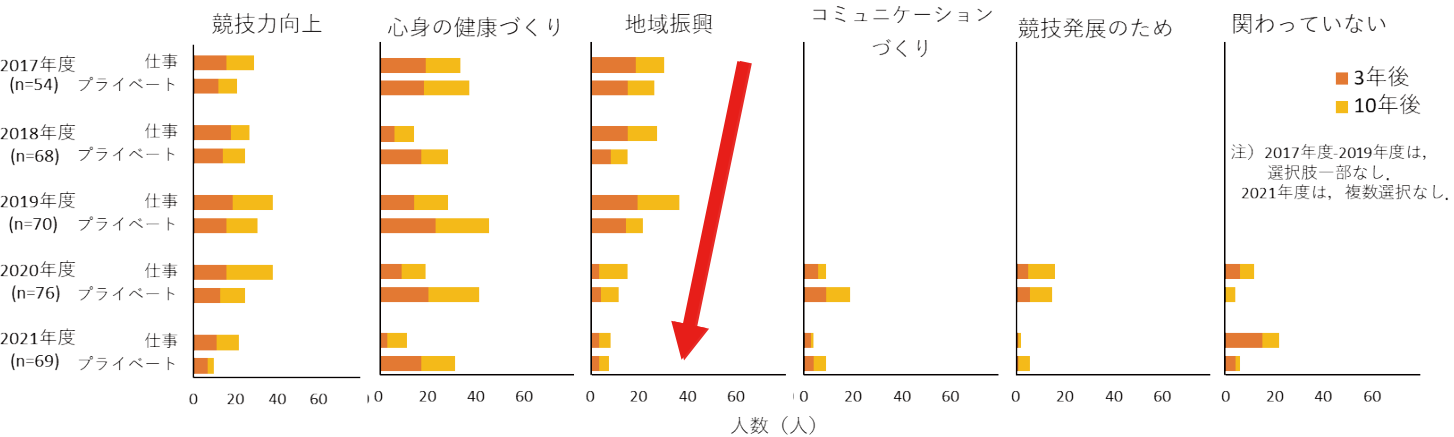
右の図は、本学を卒業後の回答（**■**）と卒業する際に回答した結果（**---**）を比較したものです。卒業後3年・10年経過した卒業生は、「今後、スポーツ・武道・健康づくりに関わりたいか」という問いに対して、仕事としては約68%以上、プライベートとしては約83%以上の人が「関わりたい」と答えていました。一方、卒業時に「関わりたい」と答えた人（**---**）は約89%、卒業後、仕事やプライベートで実際に関わっている人（**□**）は約91%以上いることから、卒業時よりも実際に関わっている人が多くいました。では、「関わりたい」と答えた人はどのように関わっているのか以下で見ていきましょう。

Q. 卒業後、スポーツ・武道・健康づくりにどのように関わったことがありますか？



「スポーツ・武道・健康づくりの関わり方」を調査した結果、「する」や「支える」スポーツで関わっている人が多いことがわかりました。特に、プライベートで「自分でする」人が増加していました。しかし、仕事で「関わったことはない」人も微増していました。

Q. どのような目的で関わってきましたか？

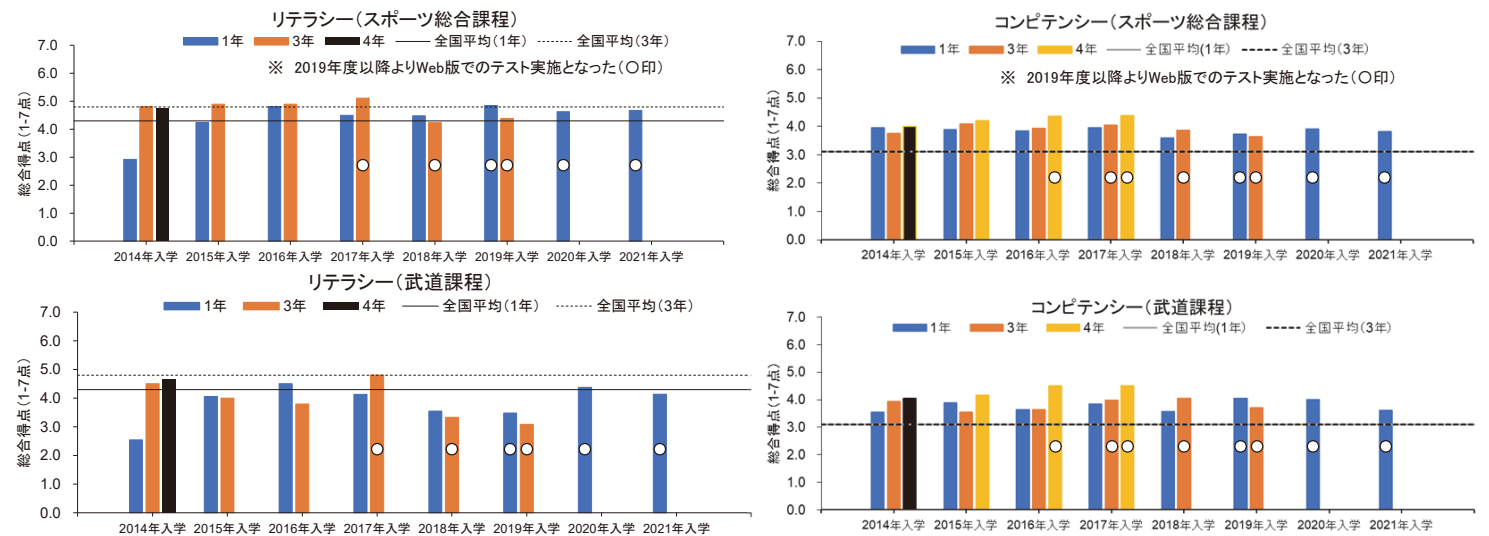


「どのような目的でスポーツ・武道・健康づくりに関わってきたか」をみると、競技力向上や心身の健康づくり、地域振興を目的に関わっている人がほとんどでした。しかし、5年間で、地域振興を目的として関わっている人が減っていることがわかりました。本学の卒業生は、卒業時よりも実際に関わっている人が多くいること、仕事やプライベートでの競技力向上や心身の健康づくりを目的として「する」スポーツに関わっている人が増えている傾向にあるといえるでしょう。一方、本学の理念のスポーツ・武道文化の振興・発展への関わりである「地域振興」は、少なくなってきているので、教育改善が期待されます。（文責 青柳）

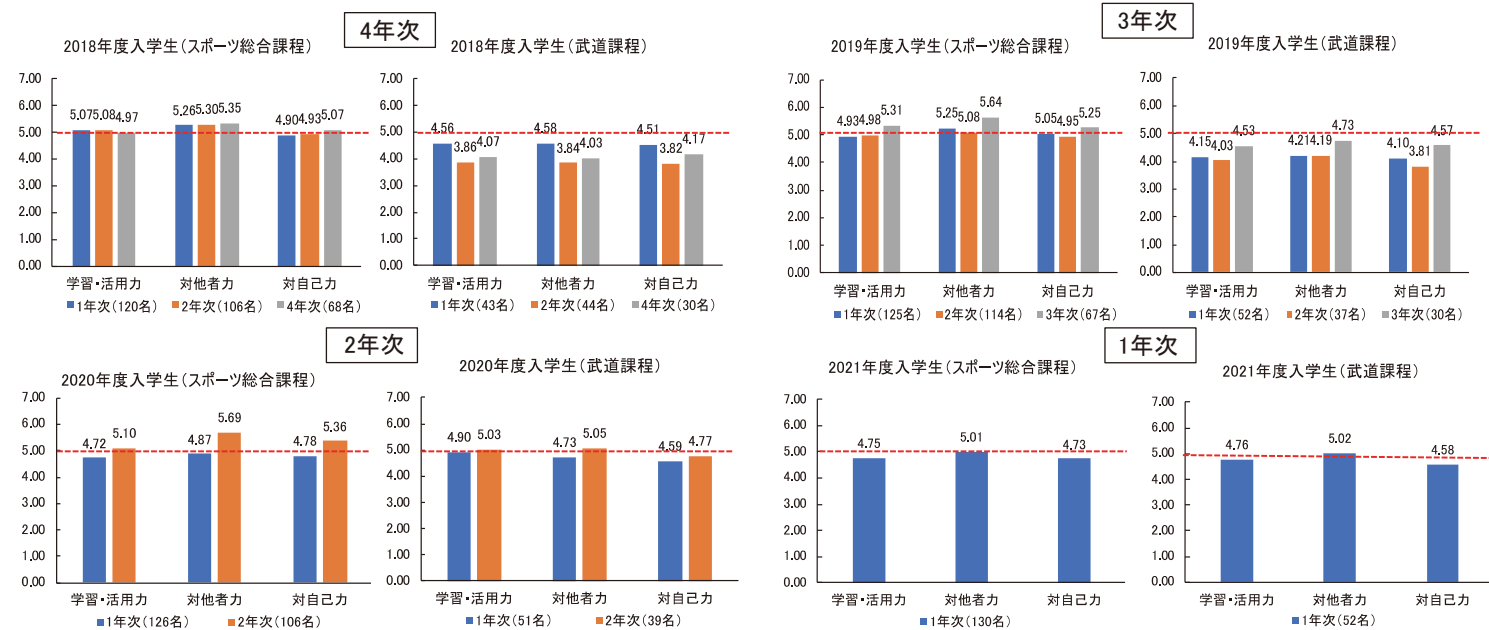
PROGの経年変化 (2014～2021年度入学生を対象に)

PROGは、社会で求められる汎用的な能力・態度・志向（＝ジェネリックスキル、社会人基礎力）を測定するテストのことです。リテラシーは知識を活用して問題を解決する力（情報収集力、情報分析力、課題発見力、構想力）、コンピテンシーでは自分にベストな状態をもたらそうとする力（対人基礎力、対自己基礎力、対課題基礎力）を測定しています。本学では、1年次前期と3年次後期に2つのテストを、4年次の卒業論文提出後にコンピテンシーのテストを実施し、それらの能力が本学の学びによりどのように伸長しているかを確認しています。下図の横線は全国の大学生の1年次（実線）と3年次（破線）の平均値を示しています。

コンピテンシーは、両課程、学年ともに全国平均値を大きく上回っています。4年次の卒業論文提出後にテストを実施するようになった2015年度以降では、3年次後期から大きな伸びを示していることを確認しております。卒業研究による教育効果を実感しているところです。一方、リテラシーについては2018年度入学生以降、3年次での伸びがあまり観られないのが気になるところです。コロナ禍によりWebでのテスト実施などが影響しているのかも知れません。今後詳しく分析し、対応策を検討します。（文責 金高）



SCCOTの経年変化 (2018～2021年度入学生を対象に)



SCCOT（スコット）は、日本のスポーツ界が目指している「プレーヤー中心の考えに基づいたコーチングを行うための行動・判断力」を可視化するテストです。2015年度に本学が開発し、2018年度までテストの実施時期を含め、試験的・段階的に実施してきました。現4年次生（上図の3年次生）からは、1年次：6-7月、2年-4年次：1-3月と実施時期も固定され、スポーツ指導に関わる専門的知識・技能・態度の修得度、実習の体験により、この行動・判断力をどのように変化させているかを経年的に把握できるようになりました。

2019年度入学生以降では、学年進行とともに上昇する傾向が確認できます。特に、専門的知識の学びが増える2年次、スポーツ指導実習を終えた3年次に大きな伸びがあることが確認できております。また、5ポイント（赤破線）は、スポーツ指導歴を3年以上有する指導者の平均レベルを示します。そのレベルにも到達するようになっています。今後は、「コーチのコーチ」と言われるコーチデベロッパー（日本スポーツ協会指導者養成講習会の講師の名称）の平均値である6-7ポイントにもなれるように、学びや教育の充実を図ります。

なお、SCCOTは山梨学院大学・スポーツ科学部でも1年次と3年次に実施され、徐々に体育系大学やスポーツ指導者が関わる団体でも活用されてきています。今後、色々な場面で耳にするテストになるかも知れません。「鹿屋体育大学発のテスト」ですので、各自の結果とともに、その意味についてもより深く理解し、行動・広報できるようになることを期待します。

（文責 金高）